

# 星河蒼天

～輝き合い、高め合い、未来の光をつかみとる～

令和6年 9月 2日  
小坂井中学校 3年  
学年通信 第8号

## 主人公は「あなた」～未来をつかむために～

体育大会、坂中祭、合唱コンクール、この学年メンバーで迎える最後の行事。最後の時間を最高の時間にするために。そして、中間テスト、実力テスト、期末テスト、日々の授業、自分自身の進路選択のためにどのような努力をするのか。勝負の2学期が今日からいよいよ始まります。

### 夢中・熱中・ワクワク中

2学期始業式学年代表

皆さん、夏休みはもう終わりましたよ。今日から2学期です。皆さんはどんな2学期にしたいと思いますか？

僕は入学してから、「夢中・熱中・ワクワク中」を自分のモットーにしてきました。これは、「自分のやりたいことに挑戦し、ワクワクする学校生活にするぞ！」という僕の想いです。そして、2学期はワクワクする行事がたくさん詰まっています。

まずは体育大会です。3年生の応援合戦では応援団長として仲間と熱中し、令和6年、僕ら3年生が確かにここにいたことが、みんなの心に刻まれるような熱い応援合戦にしたいです。そして、最後に僕の大切な仲間と共に優勝をもぎ取るつもりでいます。

次に待っているのは、坂中祭です。合唱コンクールの練習では、全員がまとまらず、大変さを感じる時もあります。しかし、みんなの気持ちがひとつになり、「きたー！」という瞬間にたどり着いたとき、最高にワクワクすると思います。僕は、そんな一回一回の練習を大切にしたいです。そして、本番では2年半共に過ごしてきた絆を生かし、全身全霊の歌声で、皆さんの心を震わせたいと思います。

そして、僕たち3年生には、受験が近づいています。僕は今日の学年代表スピーチに選ばれてから、自分に足りないものは何かを考えました。その答えは「覚悟」です。がむしゃらに努力し、「必ず行きたい高校に入るぞ！」という覚悟が足りないことに気づきました。

だから今日、この場で宣言します。

僕は今日、僕のスマホからYouTubeを削除します。

そしてその時間をワクワクする高校生活を手に入れるための勉強に使います。僕の言葉にドキッとしたあなたは、僕にとってのYouTubeのように、ついやってしまう何かを一緒に捨ててみませんか。

最後に3年生の皆さん、今こそ覚醒のときです。これまで見せてこなかった秘めた力を解き放ち、僕ら193人の星河軍団、一人一人がつかみたい未来を、必ず一緒に手に入れましょう。

## 体育大会学級旗紹介～『一つ』に向けて～



各クラスの学級旗が完成しました。どの学級にも体育大会に向けてみんなの思いが『一つ』になるような工夫と学級カラーがあふれる旗になっています。学年出校日には、応援合戦の練習をしたり、おそろいの学級Tシャツをみんなで着用して体育



大会に向けた思いを高めたりする姿が見られました。また、坂中祭のFSPに学級で出演するために練習する様子もありました。どの学級活動でも、夏休み中に登校して準備をしたり、企画や制作をしたりするなど活動を支える人がいます。学級のメンバーで迎える最初で最後の体育大会、坂中祭に向けて、自分から行動していく『輪』をどんどん広げられることを楽しみにしています。

## 無意識のうちに

今「男だから」「母親だから」「子供だから」などの理由で、望まぬ役割を強いられてきた人々が、その理不尽さに気づき始めています。他者から押し付けられた生き方をするのではなく、「自分らしくありたい」と声を上げているのです。「〇〇らしさ」は、その人の自己肯定感を満たす材料になりますが、同時に、あるべき姿を固定する鎖にもなります。

無意識の偏見に苦しむ人が、「自分らしく」生きられる社会を創るべきです。この場にいる全員が、差別はあってはならないことだと分かっている、と信じています。分かっているけれど、してしまうのが「無意識の偏見」なのです。今からでも遅くはありません。相手の肩書きや性別といった、社会的な枠でその人を見るのではなく、相手を個人として理解し、相手の立場になって考えることを心がけていきましょう。僕たち一人ひとりが、そのような意識をもつことで、未来は大きく変わっていくのです。誰もが「自分らしく」生きられる社会を、みなさんと一緒に創り上げられることを願っています。

※第46回豊川市中学生の主張 小坂井中学校の代表の主張より一部抜粋

8月21日（水）に行われた豊川市中学生の主張に、小坂井中学校を代表した3年生生徒が参加しました。彼の主張の一部を紹介します。ぜひ皆さんにも考えてもらいたいことです。「偏見」や「先入観」で人を判断したり、物事を考えたりすることは誰にでもあることではないでしょうか。そうした見方や捉え方を『無意識』のうちにしてしまうことにまずは気づくことができるかどうかだと思います。その『枠』を取り除いてその人自身や物事を改めて見直したら、どのように感じたり、考えたりしますか？



## 【配信限定版】『無意識のうちに』全文

キッチンで、夕食の支度をする人がいます。オフィスで、部下の資料に目を通す人がいます。夜景の見えるレストランで、支払いをする人がいます。パイロットになる夢を、発表する子供がいます。想像したのは、男性の姿ですか。女性の姿ですか。

これは、ACジャパンのラジオCMの一部です。みなさんはどう感じましたか。僕は、性差別はなくすべきだし、自分は差別なんてしていない、とっていました。しかし、このCMを聞き、僕は無意識の偏見を拭いきれていないことに、気づかされました。

性差別に限らず、このような無意識の偏見は、私たちの生活の中に多く存在していると思います。

例えば、僕は男で中学生で長男です。特に意識したことはありませんでしたが、無意識のうちに、男らしい言葉遣い、中学生らしい行動、長男にふさわしい姿を示していたのではないかと思います。

ある漫画の主人公は、鬼との戦いで負った傷が癒えないまま、新たな鬼狩りの任務に赴くことになりました。そこで、今までとは比べ物にならないくらいの強敵と戦うことになります。

圧倒的な威圧感と、怪我のため踏ん張りが効かない状況の中、心の中でこうつぶやき、自らを鼓舞します。

「俺は長男だから我慢できたけど、次男だったら我慢できなかった。」

長男であることは、主人公にとって誇りであり、弟や妹、さらには他の自分より弱い人々を命がけで守る原動力になっていたのだと思います。しかし、長男であっても怪我をすれば痛いし、鬼を前にすれば恐怖を覚えます。「長男である」それだけの理由で、自分の意思ではなく、他者から、恐怖から逃げないこと、命がけで家族を守ることを、強いられるようなことがあってはならないと思います。

今「男だから」「母親だから」「子供だから」などの理由で、望まぬ役割を強いられてきた人々が、その理不尽さに気づき始めています。他者から押し付けられた生き方をするのではなく、「自分らしくありたい」と声を上げているのです。「〇〇らしさ」は、その人の自己肯定感を満たす材料になりますが、同時に、あるべき姿を固定する鎖にもなります。

無意識の偏見に苦しむ人が、「自分らしく」生きられる社会を創るべきです。この場にいる全員が、差別はあってはならないことだと分かっている、と信じています。分かっているけれど、してしまうのが「無意識の偏見」なのです。今からでも遅くはありません。相手の肩書きや性別といった、社会的な枠でその人を見るのではなく、相手を個人として理解し、相手の立場になって考えることを心がけていきましょう。僕たち一人ひとりが、そのような意識をもつことで、未来は大きく変わっていくのです。誰もが「自分らしく」生きられる社会を、みなさんと一緒に創り上げられることを願っています。